A TREASURY OF WORLD LITERATURE

# 世界の文学

47

魯　迅

吶　喊　　高橋和巳訳

野　草

彷　徨

朝花夕拾(抄)

故事新編(抄)

講演・評論6篇

中央公論社

世界の文学　47　©1967

魯　迅

訳者　高橋和巳

昭和42年6月1日初版印刷
昭和42年6月10日初版発行　価390円

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

# 目次

## 吶喊


吶喊自序　7
狂人日記　12
孔乙己　22
薬　27
明日　40
小さな事件　46
髪の物語　49
風波　54
故郷　62
阿Q正伝　73
端午の節句　127
白光　135
兎と猫　140
家鴨の喜劇　145
宮芝居　148

## 野草


題辞 161
秋夜 162
影の告別 164
乞食 166
わが失恋 167
復讐 168
復讐（その二） 170
希望 171
雪 173
凧 175
よき物語 177
旅人 179
死火 185
犬の反駁 187
失われたよき地獄 188
墓碑銘 190
くずれた線の震え 191
立論 193
死後 194
このような戦士 198
賢者と愚者と奴隷 200
臘葉 202
あわい血痕の中に 202
まどろみ 204


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

彷徨


祝福　209
酒楼にて　227
幸福な家庭　238
石鹸　245
常夜灯　255
みせしめ　265
朝花夕拾（抄）
藤野先生　345
故事新編（抄）
薇を采む　361

高先生　270
孤独者　279
傷逝　301
兄弟　321
離婚　332
范愛農　351
出関　378

非攻 388
起死 399
文芸講演（抄）
ノラは家出してからどうしたか 413
魏晋の気風・文章と薬・酒との関係 427
革命時代の文学 420
日本語で書いた文章（抄）
火・王堂・監獄 447
私は人をだましたい 457
現代支那に於ける孔子様 452
解説 462
年譜 493

吶とつ

喊かん

# 吶喊自序

私も若いころには多くの夢をえがいたものだったが、その後あらかた忘れてしまった。だが自分でも決して惜しいとは思わない。回想というものは、人をたのしませるけれども、時として人を寂しがらせることも避けえない。こころの糸すじを過ぎ去った寂寞の年月にいつまでもつないでいたとて、何の意味があろう。私にはすっかり忘れてしまえないのがやりきれぬ。その忘れきれぬ一部分が、今になって『吶喊』となった次第である。

私はかつて四年あまりの間、しょっちゅう――ほとんど毎日、質屋と薬局に出入りした。年齢は忘れてしまったが、ともかく薬局の帳場がちょうど私と同じ背丈であり、質屋のは私の倍も高かったころだ。私は倍も高い帳場の外側から衣服や首飾をわたし、蔑まれつつ銭を受けとり、それから背丈ほどの帳場まで行って長思いの父のために薬を買った。家に帰ってからは、また別の仕事を手伝わねばならなかった。というのは処方を書いた医者がごく名高い人だったので、用いる薬引（補助薬）も風変りだったからである。冬の蘆の根、三年の霜をへた砂糖きび、蟋蟀それももとつがいのもの、実のなった平地木（小瀟木）など、……多くはたやすく手に入るものではなかった。ところで結局私の父は日ましに重態となって死んでしまった。

まずまずの暮しの家から貧窮に墜ちた人なら、その過程で、あらまし世人の正体を見られただろうと私は思う。私はN市へ行ってK学堂に入りたいと思っていた。どうやら人と違った道を歩み、異なった土地に逃げ、様子の違った人々とつきあおうと思っていたらしい。私の母はやむなく、八円の旅費を工面して、いいように使いなさいと言った。だが彼女は哭いた。これはまさしく人情としてさもあるべきことだ。というのは当時は読書をし科挙を受けるのがまっとうな道で、いわゆる洋務（外国の学問）を学ぶことは、世間では行き場のない人間が、やむなく魂を夷狄に売りわたすものとみなして、いっそう嘲弄し排

斥したからだ。まして母にとっては自分の息子を手放さねばならなかったのだ。だが私もこうしたことに構ってはいられず、結局N市へ行ってK学堂に入学した。この学校で、私ははじめてこの世にはなお物理、数学、地理、歴史、絵画、体操などがあることを知った。生理学は教えられず、ただ私たちは木版本の『全体新論』や『化学衛生論』のたぐいを読んだにすぎなかった。私はいまでも覚えいる、以前の医者の議論や処方と、いま知ったものとを比較してみて、次第に漢方医学が意識的あるいは無意識的なペテンであることを悟ったものだ。同時にまた騙された病人とその家族に対する同情をおぼえた。さらに翻訳された歴史によって、日本の維新は大半西洋の医学に端を発している事実をも知った。

こうした幼稚な知識のゆえに、のちに私の学籍は日本の一地方の医学専門学校に置かれることとなった。私の夢は甘美で、卒業して帰れば、私の父のように惑わされている病人の病苦を癒し、戦争の時には従軍して軍医となり、一方また中国人の維新に対する信仰を促進するつもりだった。微生物学を教授する方法に、いまどのような進歩がもたらされたかをもう私は知らない。ともあれ当時は幻灯を用いて、微生物の形態を映し出した。それで、講義が一段落しても、なお時間にゆとりがあるときには、教師はついでに風景とか時事的な場面やらを映して学生に見せ、それであまった時間をうめたものだった。時はあたかも日露戦争のさなかで、おのずと戦争に関する場面が比較的多かった。私はその教室で、同級生の拍手と喝采にしばしば調子をあわせねばならなかった。あるとき、私は画面で久しく無沙汰していた大勢の中国人と突然出会った。一人は縛られて真中におり、多くは左右に立っていた。どれも屈強な体格だが、無神経な表情をしていた。解説によると、縛られているのはロシアのために軍事スパイとなった者で、いましも日本軍にみせしめに斬首されるところであり、とり囲んでいるのはそのみせしめの盛挙を見物に来ている人々とのことだった。

その一学年が終らぬうちに、私はすでに東京に来ていた。あのときのこと以来、私は医学は緊急の仕事では決してなく、およそ愚弱な国民は、たとえ体格がいかに壮健で、屈強であろうと、全く意味のないみせしめの材料と観客になれるにすぎず、病や死のいくばくかは不幸と見なすまでもないと思ったからである。だから私たちの



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

第一義は、彼らの精神を改変することであり、そして精神の改変に役立つものとしては、そのとき当然文芸をとりあげるべきだと思われた。そこで文学運動の提唱を思い立った。東京にいた留学生はほとんど法政、理学ないしは司法、工業などを学んでいて、文学や美術をおさめているものはいなかった。しかし冷淡な空気のうちにも、幸いに数人の同志をみつけだし、その他にも必要な数人を集めて、相談ののち、第一歩は当然に雑誌を出すことになった。誌名は「新しい生命」の意味をとることとしたが、当時私たちはたいてい復古の気風をおびていたから、単に『新生』と名づけた。

『新生』の出版期日は迫ったが、原稿を書くはずの数人がまっさきに雲隠れし、つづいて資本が逃げて、結果、無一文の三人だけが残った。はじめた時からして時世に背いていたから、失敗の時はむろん訴える人とていない。しかもその後その三人すらそれぞれの運命に翻弄されて、いっしょに集まって自由に将来の甘美な夢を語りあうこともできなくなった。これが私たちの日の目を見なかった『新生』の顛末である。

私がそれまで経験したことのない無聊を感ずるようになったのは、これ以後のことである。当初はそれを感ずる理由がわからなかった。のちになって考えれば、およそ一人の主張は、賛同をえられれば、その前進が促され、反対されれば、その奮闘が促される。たった一人見知らぬ者の中で叫んで、さっぱり人々に反応がなく、賛同もされず、また反対もされねば、あたかもはてなき荒野に身をおいたように、手のほどこしようがなくなってしまう。それはどんなにか悲しいことか。かくて私の感ずるものは寂寞となった。

この寂寞はまた一日一日と成長して、大きな毒蛇のように、私の魂にまつわりついた。

ところで私はゆえ知れぬ悲哀をいだいてはいたが、決して憤っていたわけではない。なぜならこの経験は私を反省させ、己れみずからを思い知ったからだ。つまり私は臂を振って一声さけべば応ずる者が雲集するといった英雄では決してないことを。

ただ私の寂寞は駆除せねばならなかった。なぜならそれは私にとってははなはだしい苦痛だったから。それで私は種々の方法を用いて、私自身の魂を麻痺させようとし、自分を国民の中に埋没させ、自分を古代に回帰させ

た。のちにさまざまなより寂寞とした、より悲哀しいことを体験もし傍観もしたが、すべては思い出したくなく、むしろそれらを私の脳とともに泥中に消滅するがままにさせたいと思う。ただ私の麻酔法もすでに功を奏しているとみえて、もう青年時代のような慷慨激昂の気持はなくなった。

S会館（北京の紹興会館）には間口三間の家屋があった。言い伝えではむかし庭の槐の樹で女が縊死したということで、いまはもう槐の樹はよじのぼれないほど高くなっていたが、その家屋にはなお住み手はなかった。長年、私はその家屋に寓居して古い碑文をうつしとっていた。他郷のこととておとずれる人もまれで、古碑の中でもどんな問題にも主義にも出会うことなく、私の生命はいながらにしてひっそりと消えていった。これこそ私の唯一の願望でもあった。夏の夜、蚊が多く、棕櫚の団扇を揺すぶりながら槐の樹の下に坐り、密生した葉のあいまからちらちらする晴れた空を見ていると、おくての青虫がよくひやりと首筋に落ちた。

そのころたまたま話に来たのが旧友の金心異（銭玄同のこと。魯迅と同郷の友で、文学革命を指導した）である。手さげの大きな革カバンをほろテーブルの上におき、長衣をぬいで、向いあって坐った。犬をこわがって、心臓をまだどきどき躍らせているようだった。

「君、こんなものを写して何の役に立つのかね」ある夜、彼は私のやっている古碑の写本をめくりながら、研究めいた質問を発した。

「何の役にも立たん」

「じゃ、どういうつもりで写しているのかね？」

「どういうつもりもない」

「なにか文章を書くといいと、思うんだが……」

私は彼の考えを理解した。彼らはちょうど『新青年』を刊行していた。ところが当時はまだ賛同する人もいないばかりか、反対する人すらないらしかった。彼らも多分寂寞感にとらわれているのだろうと、私は思った。だが言った。

「かりに鉄製の部屋があって、窓も戸もなく打ち破れそうになく、中に睡りこけている人が大勢いるとする。遠からずみな悶死するだろう。だが昏睡のままに死んでゆけば、瀕死の悲哀は感ぜずにすむ。いま君は大声をあげ

て、目醒めかかった数人を起して、この不幸な少数者に救うべくもない臨終の苦痛をなめさせようとしている。それで彼らに申しわけが立つと思うかね？」

「だが数人が起きてしまった以上、その鉄の部屋を打ちこわす希望が全くないとは言えまい」

そうだ、私には私なりの確信はあるとはいえ、希望ということになれば、それは抹殺しえない。なぜなら希望は将来にかかわることであり、私の絶無だという証明でもって、彼のありうるとする考えを折伏できない。そこで私は文章を書くことを承諾した。それが最初の一篇『狂人日記』である。それ以来、乗りかかった船で、小説めいた文章を書いては、友人たちの依頼のお茶をにごし、積りつもって十余篇となった。

私自身としては、今はもうせっぱ詰ってやむを得ず発言する人間ではなくなったと思う。ただなおも当時の我が身の寂寞と悲哀を忘れかねてか、時にはつい吶喊をあげてしまうのだが、寂寞の中を突進する猛士をなぐさめ、はばかることなく先頭に立ってもらえればとひそかに思う。私の喊び声が勇ましいか悲しいか、憎むべきか笑うべきかについては、顧みている暇はない。ただそれが吶喊であるからには、むろん主将の命令に従わねばならない。それゆえ私は往々にして曲筆を弄することにもこだわらなかった。『薬』における瑜児の墳にはなくもがなの花環をそえたし、『明日』の中でも、単四嫂子がついに息子に会った夢を見なかったとは書かなかった。なぜなら当時の主将は消極をきらったからである。自分としても、みずから苦しんだ寂寞を、私の若いころと同じようにいい夢を見ている青年に伝染させたくはなかったからである。

こう書いてくると、私の小説が芸術とほど遠いことは、思い半ばにすぎる。だが今日にいたるも、なお小説の名を冠し、かつ文集を編む機会までもちうることは、なにはともあれ僥倖と言わねばならない。ただ僥倖は私を不安にさせるが、しかし世間にしばらくはなお読者がいると空想することは、さすがにやはり嬉しいことである。

それでついに私は私の短篇小説を編集し、かつ印刷に付し、また上に述べたような理由から、これを『吶喊』と名づけたのである。

一九二三年十二月三日、魯迅北京にて記す。

# 狂人日記

某君兄弟、いまその名は伏せるが、いずれも中学時代の親友である。別れてより歳久しく、音信はいつしかとだえた。先日偶然その一人が大病をした由を聞いた。おりあって郷里に帰り、寄道して訪れたが、会えたのは一人だけ、病者はその弟のほうだということだった。わざわざ遠路おたずねをたまわったが、すでに快癒して、某地におもむいて任官を待っている、と。そして大いに笑い、日記二冊を示して言うに、当時の病状がわかりましょう、旧友の君にさしあげましょうか、と。持ち帰って一読すると、患っていたのは「強迫症」のたぐいと思われた。言葉はすこぶる錯雑していて一貫性なく、荒唐無稽の語も多い。月日もしるされていないが、ただ墨の色や字体が一様でないことで、一時に書いたのでないと知れる。たまにほぼ脈絡のととのった部分もあり、いまそれを抄録して一篇とし、医師の研究に供しよう。文中の字の誤りも、一字も訂正しなかった。ただ人名はみな村びとだが、世間には知られず、本筋とは関係がないゆえ、ことごとくあらためた。書名に関しては、本人が治癒後につけたものゆえ、あらためなかった。七年四月二日しるす。

## 一

今夜は、いい月だ。

わたしが月を見なくなってからすでに三十余年になる。今日は見たから、気分はすばらしくさわやかだ。以前の三十余年間は、まったく気がふれていたのだとはじめて気づく。さて十分に用心せねばならぬ。でなければ、あの趙家の犬が、なぜわたしをじろじろ見るのか？

わたしが恐れるのは当然なのだ。

## 二

今日はまったく月はなく、わたしはまずいなと思った。朝用心して家を出ると、趙貴翁の眼付がおかしい。わた

しを恐れているようであり、わたしをやっつけようとしているようでもある。さらに七、八人の人が、ひそひそ耳打ちしてわたしのことを論じていた。彼らもわたしに見とがめられるのをおそれている。道ゆく人は、みなそうだった。そのうち一番凶暴な奴が、大口を開けて、わたしに笑いかけた。わたしは頭のてっぺんから足の先までぞっとした。彼らの手筈は、すっかりととのっているとみえる。

だがわたしは恐れず、もと通りわが路を歩む。行く手に子供たちがいて、やはりわたしのことを議論している。眼付も趙貴翁と同様であり、顔色もみな青黒い。わたしと子供たちの間に何の怨みがあって、彼らまでこんな様子なのかと思う。こらえきれず「言ってみろ！」と怒鳴ると、子供たちは逃げて行った。

わたしは考えた。わたしと趙貴翁の間に何の怨みがあるのか、道ゆく人もまた何の怨みがあるのか。ただ二十年以前、古久先生の古い大福帳を、踏んづけたことがあり、古久先生はたいそう御不興だった。趙貴翁は先生と面識はないが、きっと噂を聞いて、人ごとならず憤慨し、通行人も捲きこんで、わたしに敵対させたのだろう。それにしても子供たちは？　あのとき、彼らはまだ生まれてはいなかった。なぜ今日も嫌な眼付で、わたしをこわがるように、わたしをやっつけようとするように見るのか。これは本当におそろしい。わたしにはわけがわからず、しかも悲しい。

そうだ。彼らの両親が教えこんだのだ！

## 三

夜どうしても睡れない。何ごとも研究してみてこそ、明らかになる。

彼らの中にも——県知事に枷をはめられた者がおり、地主に頬をぶたれた者もいる。小役人に女房を寝とられた者がおり、両親が金貸しにいびり殺された者もいる。彼らはそんな時にも、昨日のような恐ろしい顔付はしなかった。あんな凶暴な顔付もしなかった。

とりわけ奇怪なのは昨日街であった女だ。息子を殴りつけ、「ひねっ児め！　お前を咬んでやらんことにゃ腹の虫がおさまらないよ」とぶつぶつ言いながら、そのくせ眼はわたしのほうを見つめていた。わたしはびっくりし、どぎまぎした。あの青い面の歯をむき出したやつら

が、みな大声で笑った。陳老五がいそいでやってきて、わたしを家にひきずり戻した。

わたしを家にひきずり戻しておきながら、家の者はみなわたしを見も知らぬように振舞う。彼らの眼付は、赤の他人と同様だ。書斎に入ると、すぐ戸に鍵をかけた。まるで鶏か鴨のように。この一件で、どんなからくりがあるのかますますわからなくなった。

数日前、狼子村の小作人が不作を訴えにきて、兄に話していた。彼らの村の極悪人が、皆に殴り殺され、数人が彼の心臓と肝臓をえぐり出して、油でいためて食った、と。胆力が増すのだそうだ。わたしが言葉をはさむと、小作人と兄がじろじろとわたしを見た。今日になってわかったことだが、彼らの眼付は、街のやつらと全く同じだった。

想い出すと、頭のてっぺんから足の先までぞっとする。彼らは人間を食えるのだ。とすればわたしを食わないとは言いきれぬ。

そう、あの女が「咬んでやる」と言った言葉と、あの青い面の歯をむき出した人の笑い、一昨日の小作人の話とは、明らかに暗号だったのだ。彼の話の中身はすべて毒、笑いのうらはすべて刃だったことを発見した。彼らの歯は、すべて白くぴかぴかと列んでいる。それはてっきり人を食う道具なのだ。

自身では、わたしは悪人ではないつもりだが、古家の大福帳を踏んづけてからは、そうとも言いきれない。彼らには別な考えがあるらしいが、わたしには皆目推測できない。いわんや彼らは仲違いすれば、たちまち人を悪人よばわりする。わたしはいまでも憶えている。長兄がわたしに論文の書き方を教えたとき、どんな善人でも、少しけなすと、彼はそこに圏点を打ったものだ。悪人を二こと三こと弁護すると、彼は「天を翻らす妙手にして、衆と同じからず」とほめた。わたしには彼らの考えが究極のところどんなのか、推測できない。ましてや取って食おうとしてる際なのだから。

何ごとも研究してみてこそ、明らかになる。古来つねに人は人を食ってきたことは、わたしも憶えているが、あまりはっきりしない。わたしは歴史をひもといて調べてみたが、その歴史には年代がなく、どのページにも「仁義道徳」という字がくねくねと書いてあった。どうせ眠れないから、夜半まで仔細に読んでみたら、行間に



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo